

鳥取市立湖山西小学校

1 学校の概要

北緯 35 度 31 分 20 秒 東経 134 度 10 分
14.8 秒 海抜 8.6m に位置し、昭和 63 年 4 月に竣工した 3 階建て校舎および屋内運動場（体育館）は、現在の耐震基準に適合しており、非常災害時には応急避難場所となるなど、地域の防災拠点としても重要な役割を担うこととなる。



校舎には、大津波発生時に緊急避難スペースとなるいわゆる「屋上部分」はほとんどないが、3 階床面で海拔 15.6m であり、高度の面では避難場所としての条件は満たしている。

本校は、日本海の海岸線からは近いものの真北に鳥取空港があり、海からの直接の被害は考えがたいが、周囲に高台や高い建造物がないのが現状である。

一昨年度から、東日本大震災等の教訓を活かし、火事や地震、不審者対応の避難訓練に加えて、津波の発生が予想される地震の避難訓練を実施している。前述のとおり避難場所としての条件を満たす校舎 3 階を一次避難場所として、1 階、2 階から 3 階の特別教室や多目的ホールへの避難が、安全かつ迅速に行えるよう指導している。

2 取組について

(1) 防災に関する指導

『鳥取型防災教育の手引き（第 1 版）』を拠り所として、平成 25 年度に「防災教育年間指導計画」を作成し、25, 26 年度と見直しを行った。各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間について学年ごとに、そして、学校行事関係を月別に作成するとともに、項目別に整理した。

突然起くる様々な災害に際して、安全を確保し、迅速に避難するための基本となる集合・整列・移動等の集団行動様式について、年度当初の体育学習の中で徹底することに始まり、道徳では、全学年を通じて自他の命を尊重することを重点に「生きる力」を育むことをめざし、発達段階に応じた指導実践を行った。特に、26 年度は、学校生活の中のいろいろな場面で地震に遭遇したと仮定した簡単な「シェイクアウト訓練」を取り入れ、児童に『備えよ 常に』という意識をもたせるようにした。

(2) 実践的な避難訓練

① 火災発生を想定した避難訓練 (H. 25. 5. 15.)

2 校時目の学習時、理科室で出火との想定で実施した。各教室、特別教室、および、体育館から、それぞれの避難経路を経て、運動場へと避難した。



関係機関（吉備電設）の協力を得て、『防火シャッター』を予め降ろしておき、『非常扉』を通って避難することとした。理科室出火想定の避難経路に『防火シャッター』のない学年は、避難訓練実施後に教室に上がる際、『非常扉』を通りるようにし、全児童が防火シャッター降下状態で非常扉を通って避難することを実体験させた。

防火シャッターの働きを理解させるとともに、降下時にシャッターをくぐらないこと、普段は非常扉には触れないことの指導も徹底した。

② 地震発生を想定した避難訓練 (H25. 9. 5.)

2時間目の学習時、震度5強の地震が発生したとの想定で実施した。津波発生の危険のないことを確認した後、各教室、特別教室、および、体育館から、それぞれの避難経路を経て、運動場へと避難した。

『鳥取大地震』から70年となることもあり、湖山消防署の協力、指導のもと、避難訓練実施後に、起震車による地震体験を実施した。1～4年生は、代表児童4名ずつの体験の後、全体指導を行った。5、6年生と特別支援学級の児童は、時間をとて全員に地震の揺れを体験させた。



③ 津波発生を想定した避難訓練 (H. 25. 12. 17.)

2時間目の学習時、M7.3の地震が鳥取県東部沖で発生し、5分後には、第1波の津波が到達し、14分後、6.27mの最大波が到達するおそれがある【鳥取県津波対策委員会が想定している鳥取沖東部断層地震】との想定で実施した。

緊急地震速報の音声と地震音を放送で流した後、校舎3階の教室では、危険回避行動をとりながら待機させ、校舎1、2階にいた児童は、3階の特別教室や多目的ホールへと避難させた。電気関係の不具合も想定し、ハンド型メガホンを使用して指示をすることとした。

避難訓練実施後、体育館に全校児童が集合し、鳥取県教育委員会防災教育コーディネーターの横山ひとみ先生の全体指導を受けた。地震、津波の恐ろしさをはじめ、様々な場面での避難のしかたなどについて、しっかりと考え方をさせた。映像資料が有効に活用され、簡単なクイズも織り込まれ、全学年の児童が真剣に学習することができた。



④ 大津波発生を想定した地震避難訓練と総合防災訓練 (H26. 9. 10.)

平成25年度と同様、学習時間中に【鳥取沖東部断層地震（近地地震）：M7.3 第1波到達時間・・5分 最大波到達時間・・14分 最大津波高・・6.27m】が発生したとの想定で実施した。

一次避難として、6年生を除く全校児童と教職員が校舎3階に避難をした後（6年生は修学旅行中）、津波発生の危険のないことを確認したうえで、二次避難場所

の運動場へ移動し、「第37回鳥取市総合防災訓練」に参加した。

1～3年生は、初期消火訓練を見学した後、各学級で事後指導を行った。4、5年生は、救出・医療訓練の見学、起震車体験、応急給水訓練への参加、そして、気象台やNTT等のブース見学の後、講評まで参加し、事後指導を行った。



⑤ 休憩時の地震発生を想定した避難訓練 (H26. 11. 26)

昼休憩時に、震度5強の地震が発生したとの想定で実施した。気象庁制作のDVD『津波に備える』の資料編④「緊急地震速報を使った地震・津波訓練」の音声（地震音を含む）を利用して地震発生を告知すると同時に、児童はそれぞれの場所で、危険回避の行動をとりながら待機し、津波発生の危険のないことの放送を聴き、運動場へと避難した。安全確保のため、低学年には当日の朝予告を行ったが、他の学年は予告無しでの実施とした。

予告無しの休憩時という条件での訓練を有意義なものとするため、事前学習の充実を図り、校舎内外の様々な場所での危険回避行動を具体的に体験させるようにした。ドロップ（姿勢を低く）、カバー（体・頭部を守る）、ホールドオン（揺れが収まるまでじっとしている）というシェイクアウトを種々のシチュエーションで行い、壁やガラス窓などの落下物、危険物から離れることも含めて、日常の身辺の安全についても考えさせるようにした。

当日、3年生は校外学習に出かけており、久松公園二の丸周辺での同規模の地震発生を想定して、シェイクアウト行動をとった。安否確認、経過報告のため、携帯電話に加え、鳥取市教育委員会より借用した『小型無線機』を活用した。また、学校防災アドバイザーの横山ひとみ先生においでいただき、校外学習時の適切な避難行動について、現場指導を仰いだ。



事後に、上学年児童には、「ふりかえりカード」に、地震発生時どこにいて、どのように行動したか、訓練を通じて思ったこと、いつ発生するか分からない地震に対して備えておきたいことを記入させ、『備えよ 常に』の意識を高めた。

<p>ひなんぐんじん 避難訓練ふりかえりカード(地震)</p> <p>6年 銀</p> <p>非常時発生時、どこにいましたか？ <u>図書室</u></p> <p>なぜのとき、どのような行動をとりましたか？ 2年生が、廊下で、しゃべりながらやっていたので、おまけに、廊道を開くようにしました。そして、図書室の机の下に隠れました。</p> <p>今何時で、思ったこと・感覚のこと 今日は訓練だたけど、もし本当に災害がきた時にこの訓練をし、がりと生かして物がラスにさすがず頭を守るようにしたいと思いました。</p> <p>ない・機動するか分からない状況に対して備えておきたいこと 備えておきたいことは、家で地じんが起きる時にみんなで時に待っていくところを見ておきたいです。 場所も変わらぬ備え方を変わらぬ</p>	<p>ひなんぐんじん 避難訓練ふりかえりカード(地震)</p> <p>3年 銀</p> <p>非常時発生時、どこにいましたか？ <u>図書室</u></p> <p>なぜのとき、どのような行動をとりましたか？ ぐらで、三階から二階へ下りて、廊下にしゃがりをして机の下に隠れました。</p> <p>今何時で、思ったこと・感覚のこと 因り抜けられない外いなかたので、とても行動できなくてどうすればいいのか考えたいくらいでした。</p> <p>ない・機動するか分からない状況に対して備えておきたいこと どうすればいいか地じんに対しての取り組み・家族の連らく先遣とを書いたカード</p>	<p>ひなんぐんじん 避難訓練ふりかえりカード(地震)</p> <p>5年 銀</p> <p>非常時発生時、どこにいましたか？ <u>図書室</u></p> <p>なぜのとき、どのような行動をとりましたか？ 空氣をかじりながら走るがままうなぎへ移動して走りました。</p> <p>今何時で、思ったこと・感覚のこと 因り抜けられない外いなかたなので、とても行動できなくてどうすればいいのか考えたいくらいでした。</p> <p>ない・機動するか分からない状況に対して備えておきたいこと どうすればいいか地じんに対しての取り組み・家族の連らく先遣とを書いたカード</p>
--	--	--

(3) 学校の体制整備

① 保護者との連絡体制

震度6弱以上の大規模地震が発生した場合等の非常時を想定して、児童の預かり、引き渡しを円滑に行うための連絡カードを兼ねた「緊急時引き渡しカード」を平成25年度に作成し、非常時における連絡体制を整え、平成26年度には、新入児分を含め、全児童分を更新した。

A5サイズのカラーケント紙を配付し、家庭ごとに、引き取り者の氏名、連絡方法、児童との関係が優先順に記入されたものを、学級ごとにリングファイルに綴じ、職員室の『非常持ち出し』書架内に保管している。

② 防災に関する学習の整理

学年ごとに、教科、道徳、特別活動等の年間の指導内容を確認し、防災に関する学習について整理し、年間指導計画（月別、項目別の2様式）を作成するとともに、防災教育視点の学習に取り組んだ。

体育科のプール学習では、1、2年生には、「水の怖さ」を実感させ、3年生以上には、「水の流れの怖さ」を自分たちで作り出した大きな渦の流れに逆らって進んだり、泳いだりすることで体感させた。6年生は、プール使用最終日に、『着衣泳』を実施し、望まない状態に追い込まれた場合の危機回避の方法や生命を守るために心構えを身をもって経験させた。



平成26年度には、鳥取市B&G海洋センターの方の指導で、5年生がプールで簡単なカヌーの漕法を学ぶとともに、ライフジャケットの有用性を体感した。

(4) 学校防災教育アドバイザー等の活用

平成25年度は、津波発生を想定した避難訓練に際して、緊急地震速報を活用した告知についての助言をいただき、変更実施した。より現実に近い形にすることができたので、以後継続して同様の方法をとっている。

平成26年度には、学年単位での校外学習時の地震発生を想定したシェイクアウト訓練に際して、貴重な現場指導を仰ぐことができた。

3 成果と課題

〈成果〉

- 「防災教育年間指導計画」を整理・見直しすることで、改めて生命尊重や防災という視点で指導が明確となり、児童のみならず教職員の防災意識も高めることができた。
- 『緊急時引き渡しカード』を従前から使用している「家庭環境票」とは別に、改めて作成することで、記入内容も含めて、保護者にも、緊急時の対応について、しっかりとと考えていただくよい機会となった。
- 学校防災アドバイザーの方に、専門的な見地からの助言や指導をいただくことで、児童も教職員も緊急時への備えを再考することができた。

〈課題〉

- より系統的な指導計画へと整備するとともに、各学年の指導の充実を図る必要がある。
- 実際に、保護者への引き渡しを想定した訓練を実施し、非常時に備えねばならない。